

東京の「貧民窟」

解説 鈴木 淳



図1 東京の「貧民窟」(『風俗画報』第277号、国立国会図書館蔵、カラーは巻頭図版参照)

図版の性格

上の図版は、1903(明治36)年10月、日露戦争直前の『風俗画報』第277号に掲載された。『詳説日本史 改訂版』(日B309) p.307には、ほぼ左半分が掲載されている。原題は「鮫ヶ橋貧家ノ夕」であるが、対応する本文には「貧民窟」の項があり、現在の新宿区にあった鮫ヶ橋が東京の三大貧民窟の1つであると紹介されている。

以下に示すように、明治半ば以降、貧民の暮らしや、その集住地である「貧民窟」についてしばしば刊行物で報道された。住人の生業なりわいの多くは江戸時代以来のものであったが、貧民窟という名称は、明治に用いられるようになり、その規模も大きくなっていった。移動の自由が認められるなかで、就職の内定を得ることなく地方から上京し、あるいは都市で職を失った人々の受け皿として拡大したのである。この図版は明治期に刊行物に掲載された貧民窟の図版のなかでもっとも詳細なものであ

る。

『風俗画報』の「貧民窟」の項には「凡そ卑湿ひしつの地、到る所、軒低く、壁壊れ、数千の貧民、蠢々しゅんしゅんじょ如として纔かに雨露を凌ぐしのの状、慙あわれなり。」とある。「卑湿の地」とは、大学や兵営の立地に望ましいとされた「高燥の地」の反対語で、人の健康を損ねやすい低湿地である。ここに立ち並ぶ軒が低く、壁が壊れた家々で、数千の貧しい人々がかるうじて雨露をしのいでいる状態は「あわれ」とする。「蠢々」は虫がうごめくさまなので、人間に対して使うのは不適切で、筆者と住人たちの距離感を示している。続いて唯一の金融機関である質屋、米屋、薪炭商、酒屋、魚屋、古着屋と住民の生活必需品を供給する店がこの地域内にあって、1つの社会として完結していることが強調されている。しかし、これらの店は上の図版には描かれていない。文章と図版は厳密には連関しておらず、現地での取材にもとづいて両者を作成したわけではないことがうかがえる。写実性には疑問がある模式

図とでもいうべきかもしれない。

生活環境

自分が図版のなかに入ったつもりで、家の造りを見直そう。石川天崖『東京学』（1909年、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能）がよい手引きになる。

建物は棟割長屋で、奥の壁の向こう側には別の住戸がある。屋根は板のようにみえるが、藁が薄く載せられていたという。間取りは間口1間・奥行2間か間口1間半・奥行1間半、壁はボール紙の場合もあったという。左手前の隣家との仕切りは障子のようにみえる。いずれにせよ入口の半間は土間になるので、床があって畳が敷けるのは3畳になる。ここに、4名程度が暮らしたが、それは区役所への届出がある数で、実際の居住者はもっと多かった(横山源之助『日本之下層社会』1899年、同前)。路地に面する部分には、夏や天候の穏やかな夕刻には図版のように外されているかもしれないが、基本的に表には腰高障子などが立てられていた。冬場など、それを閉めたままでも炊事できるよう各戸に煙出しの天窓がある。

路地の右手は開渠の水路があるが、左手には蓋をされた溝があるようだ。谷筋で湧き水があるので、ある程度の水量が流れていたであろう。飲食用の水は、各戸にみられる水桶で水源か水道の共用栓から運ばれ、排水は左手の2戸目でやっているように、溝に流された。便所は共用の別棟で、右端の建物がそれに当たるかもしれない。

住民の生業

この図版が夕方を描いているのは何故だろう。炊事のために表を開け放った様子とともに、住人たちの生業を多く描き込むのに、この時点が最善だったからであろう。

画面左手前には帽子をかぶり、大きな荷物を背負い、しっかりしたランプを下げているのは、や

や高価なものを商う行商であろう。その右、三味線をもった女性と木魚とバチをもつ男性は「あほだら経」など、家々を回って喜捨を求める門付けの芸能者で、赤子を背負い2人の幼児の手を引いて出迎える老女は、家族か、子守りであろう。その右手は目の不自由な按摩師かもしれない。手前の半纏はんてんを着て薪を抱えた男性は、外で力仕事をおこない、その日に得た賃銭で、薪ともう片手にもっている当座の米を買い求めたのであろう。

左手1戸目の女性も壁の三味線に手をのばしており、芸能との関係をうかがわせる。4戸目には赤い布が張られた背負子がみられ、飴売りの道具かと思われる。その右手には2台の人力車がみられる。松原岩五郎『再暗黒の東京』（1893年、同前）には、60歳を過ぎても生活のために働かざるをえない「老耄車夫ろうもう」が貧民窟で他人と同居して、車夫に必要な警視庁の許可を受けないまま営業していると紹介する。また、『日本之下層社会』は、貧民窟に居住する車夫の多くは夜に働く「朦朧車夫もうろう」であったとする。人力車の右手、水路の上におかれているのは、蕎麦や天麩羅の屋台で(「江戸市中世渡り図」、『風俗画報』第104号、1895年12月)、これからの時間に活躍するのかもしれない。

正面を向いている3戸のうち、左側は「せんだく処」という看板が上がり、この場で洗濯業を営んでいることがわかる。仕事を終え、右手の竈で炊事しつつ、奥では灸による治療がおこなわれている。その右は病人が横臥しているようだが、竈には釜が乗り、膳もみられるので、家人がいるらしい。右側の家ではやや身なりのよい男が家人を責めているようで、家賃の取立てか、借金返済をせまっているようだ。

別世界として描く本文とは対照的に、読者に身近な世界でも働く人々の生活を、愛情をもって描いているように感じられる。

(すずき・じゅん／東京大学大学院人文社会系研究科教授)